シリーズ
かほく市の文化財 No.55

遺跡 編　須恵器の窯跡群（高松・押水古窯跡群）

今回は、かほく市内の須恵器の窯跡群について紹介します。

そもそも須恵器とは、古墳時代～平安時代に作り使用された青灰色の焼物です。これらは、窯で作られ、日常的に使う貯蔵具や供膳具（食器）、調理具だけでなく、文房具、祭祀具など、非常に多くの器種がみられます。また須恵器は、もともと大陸（朝鮮半島）からもたらされた技術であり、年月を重ねていくことで独自の特徴を持つようになっていきます。

かほく市内に目を向けると、野寺、八野、黒川、元女、箕打、若緑を中心に大量に須恵器が窯で生産されていました。これらは、「高松・押水古窯跡群」として知られており、７世紀後葉～１０世紀前葉にかけて加賀北部（主に金沢平野）から羽咋あたりまで、広く須恵器を供給していたことが分かっています。そして「高松・押水古窯跡群」は、豊富な木材と良質な粘土が入手可能であり、須恵器の運搬のための河川が近いため、この地域で生産していたといわれています。

また特徴的な遺物として、「道之」と刻まれた須恵器が八野ガメ山窯跡から出土しています。これは、北加賀地域の有力氏族の「道君」との関連を示すものと考えられており、須恵器の生産に地域の有力者のバックアップがあったことを伺わせます。

５月の穏やかな空のもと、「高松・押水古窯跡群」の周囲に広がる山間の水田を見つつ、当時の姿をイメージしながら近場を散歩してみてはいかがでしょうか。

「道之」と刻まれた須恵器
八野ガメ山窯跡から出土

高松・押水古窯跡群
市内の若緑から野寺の山間部に広がる